「オイ茂平、甚い事をやりよつたで、オイ茂平前祝に一盃おごれ。」
「よつしや、皆一盃飲んで、ヤアトコセ、ヨホイヤナア。」
と若い者は賑やかにさわいで居ますが、すまんのはお玉さん、泣いて家へ歸つて來ました。
「ウワーア……、兄さん姉さん、どないしましよう。」
「オーいやゝの、どうしたんや、一寸出ると泣いて歸てからに。」
「アノ聞いとくなはれ、今妾が土橋の所を通つたら横からあばゝの茂平はんが出て來て妾を摑へて、此の間からの手紙を言付けてるに何の返事も無い、此所で逢ふたは丁度幸ひ和尚直々の勸化、サアウンと云へばよし、否と云ふなら此の鎌がドテツ腹へ御見舞申す、と鎌を振上て否か應かと手詰になつたので、妾もあんまり恐のでウンやと云ふたら、そんなら話があるよつてに向ふの辻堂まで來て呉と云ふて引張るので、晝此の樣な所で二人で話を仕て居る所を村の若い方に見付けられて、妙な噂が立といかんで今晩夜中の鐘を合圖に裏から忍んで來とくなはれ、切戸を開て待て居ます、と其の場逃れに逃げて歸りました、どないしまひよう。」
「マア、偉い事に成て來た、コレ與次平はん、與次平はん。」
「なんや。」
「なんやゝないし、偉い事やがナア。」

「イヤ殘らず皆聞いた、ヨー云ふた。」（大聲で）
「又そんな大きな聲を出して。」
「よしこうせい、今晩俺の寢間へお玉を寢させ、お玉の部屋へは此の間博勞して來た牛、まだもやしに掛てないので荒い。」
「コレ與次平はん、其の樣な事を仕てもし茂平が牛に突かれて死だら騷動やがなア」
「だんない、夜中に他人の家へ忍んで來る奴や、まして村で嫌がられてよる奴ぢや、死だら皆の者が助る、俺に任しとけ。」
日が暮ますと牛小屋から牛をお玉の部屋へ引出しまして、
「チヤイ〳〵〳〵。」
「モウー。」
「チヤイ。」
牛を蒲團の上へ寢さしますと、何時もの小便臭い藁の中より氣持が宜いので牛はベタ〳〵と寢ました。
「コラ、われをこんな所へ寢さすのんやないが、今晩茂平がうせたら、われの角で突てやれよ。」
「ショチシタ――。」